

Shinsei

生 真

號月二十

卷一十第



號念記人上榮辨

（大正十四年八月十三日）
（第三種郵便物認可）

昭和七年十二月一日發行

（每月一圓一日發行）

第十一卷第十一號

辨榮上人號發刊に就て

目次

辨榮上人の思ひ出……土屋觀道
 人間は死なぬ……中野越子
 淨土宗を蘇生せしめし
 聖者辨榮……愚民子
 追憶の記……豊用者三
 思ひ出……岩下祥兒
 辨榮聖者を
 追憶しまつりて……
 渡邊八右衛門
 秋季大會情報

□本月は上人逝きまして十三年になります日一日として上人を忘れたことのない私共にはいつも上人は私共と共に同居してゐる思ひであります。

□上人の懐かしき御姿と共に、その當時の御聲も昔のまゝに私共の心象に生きて在しますことを感じてなりません。之は偏へに上人に永年かじついでゐた私共への賜であります。

□乍然それにして、上人の現身が此の世から神去りしましたことは此の世の習ひとしてまた事實であります。静に思へばそれがまた、反つて、其の法身を此の土に降り給ふ因縁ともなりました。

□恐くは今日に於ても、上人の御靈に接して、尙深く上人の御教へに従ふものは幾萬人でありませう。あの恭謙な清く尊い無我な上人の聖容は今も尙私共の心源に輝いて居ります。

□従つてまた、十二月の四日は上人の神去りまし、記念日なれば上人を記念する人々も定めし多いことでありませう。而も此の日に於ける上人の記念日はそれがそのまゝ上人をお慕ひ申す人々の心には上人が新に降誕し給ふの日でもあります。

□上人を慕ふこと、あまりにも切なる餘り、こゝに辨榮上人號を編纂して、其の思ひ出とした譯であります。(念)

辨榮上人の思ひ出

土屋觀道

一、上人と私

□上人逝きましてからもう十三年になります、乍然私の心には少しも上人とお別してゐる心もせぬ。時には上人が在れたらと思ふこともないではありませんが、いつでも上人と一緒に居るやうな氣持がしてゐるからでありませう。

□乍然、月日の立つのは速いもので、静に考へれば已に十三年が夢のやうに暮れて居ります。光陰矢の如しと古人も云つて居りますが、思へば思ふほど人生の一生が今にも過ぎるやうな氣がしてなりません。

□私が初めて上人にお目にかつたのは大正五年の春、私が丁度宗敎大學を卒業する年でありました。かねて上人の事は念佛三昧發得の人として、其の名を聞いて居りましたので、上人が淺草の誓願寺においでだと聞いて御訪ねしたのが初でありました。

□其の年の四月、學校を卒えて六月越後寺院の特招を受けて、上人と共に佛敎講習會に行くことにな

つたのが、上人にお伴する機会となりました。七月私には中島老師のお伴して北海道に行く爲めに、上人と越後の中條でお別れしましたが、翌年の一月にははからずも上人を今の多聞寮にお迎へするやうになりました。

□五年の秋上人は下谷の教會を設けになりましたが或るお弟子が上人のお金を多分に費ひ込んだのでお困りでしたので、中島老師のお許しを得て、上人を今の學寮にお迎へしたのであります。それが六年の九月には中島老師も學寮に引越され、三人で自炊するやうになりました。

□其の後、私の弟や、今朝鮮に居る山口常賢氏が一緒にになり、爾來上人は大正九年御遷化の時まで、其の籍を學寮に置かれたのであります。今から思ふても、當時の學寮は特に光明の生活に輝いてゐたことが偲はれます。

二、上人の日常生活

□「心内にあれば色そこに現はる」とは昔からよく云はれることでありますが、上人の御生活は全く念佛の現はるとしか思はれません。而も其のくせに、上人の御生活にはあまり稱名の御聲が口に出ることはありませんでした。之は上人が念佛せられないが爲めではありませんでした。

□私はそれを初の間は不思議の一つにして居りました。そして、それは上人が念佛せられないのではなくて、全く念佛三昧になり切つて、光明裡中に安住し、心が故だぞ知りはれました。而も之は上人が念佛三昧の中から、慈光宣傳の爲めに専念してゐられる還相廻向の姿であつたのであります。

□従つて、上人が一度御念前に向はれて念佛せられるとき、特に朝夕の拜禮の時、或は別時三昧會の時、上人の念佛は全く我を忘れた念佛の三昧であつて、其の聲のうるはしさ、涼しさ、丸で此の世のものとも思へぬほどのさわやかさでありました。

□私はその聲に何と云ふ涼しい、透き徹つた、美しい聲だらうと、時々聞かされることがありましたが、之は法然上人のお歌に「阿彌陀佛と心を西にうつせみのもぬけはてたる聲ぞ涼しき」とあるのと思ひ合せて、其のこの間違ひでないことを思ふのでした。

□それに今一つは上人の御生活にはいつも如來の慈光に輝いてゐられるやうな風光があつたことです。之は特に上人の御姿に接した人々の多くが感ずるところであります。之は上人の御生活がいつも念佛三昧に入りひたつて御光の中に居られるやうな感じがせられました。之は上人の御生活がいつも念佛三昧に入りひたつてゐられる證據でもありますが、又特に上人の偉人であらせられた點でもありませう。

□その他、上人の御生活がいかに質素であり、萬事につけて少しの隙もあらせられなかつたかにはよく人の知る處であります。それに學も深く徳も高く、あらゆる方面の常識にも非常に廣く渡らせられたことも人並みではありませんでした。多くの人が上人をミオヤのやうにお慕ひしたのもかうした上人の心に觸れたからであります。

三、上人の宗教

□上人の宗教がどんなものであつたかは多くの書物が遺つてゐるので之を見ればよく判ることです。乍然その中でも上人の宗教が從來の宗教に比して、非常に優れた宗教であつたことは上人に接した人のひとしく知る處であります。

□上人は此の點を一層明にする爲めに「光明主義」と云ふ言葉で以つて、其の事を現はさうとしてゐられます。光明主義とは阿彌陀佛の慈光の中に生活すると云ふ意味であります。それは從來の現世主義と未來主義との兩宗教を止揚して、如來の光明を中心として、此の世から永遠に生きると云ふ宗教でありました。

□其の宗教の目的が菩提涅槃にあると云ふことは上人の宗教が大乗佛教の流れの中にあるが故に當然の事でありませんが、彌陀の淨土を以つて、一切宗教の歸趨すべき中心とせられたことは最も著しい見解でありました。永遠の生命と常劫の平和とは上人の最も尊はれた處であります。

□尙宗教の本尊として、上人の宗教は阿彌陀佛を本尊として、諸宗の中心、諸佛の根本、法報應の本地と見られて居ります。之は從來の淨土教が未だ嘗て云はない處でありまして、特に上人の宗教が之を高調してゐることは注目すべき點であります。而も從來の淨土教が往生淨土を中心として、未來主義に傾き切つて居つたのを、如來を中心とする光明生活を此の土に置かれたことは一層上人の宗教の尊い處であります。

四、上人の滅後

□たゞ茲に悲しむべきは上人の滅後、上人の光明主義が果してどれだけ此の世に傳つてゐるか云ふ點であります。殊に今日、多くの光明主義を云ふ人は多いが、その中の幾人が果して、上人の光明主義を眞に傳へてゐるかは大いなる疑問であります。

□之はいかに注意し、又努力しても、眞實の宗教はその人の力程度にしか、之を傳へることはできないので、又之を受くる方の人から云つても、やつぱりその人の力程度にしか之を受けるとはできないものであります。それがともすれば上人の眞意と相反するものにならへ成り行くと云ふことは寧ろ悲しむべきことでありませぬ。

□就中、上人の滅後に於て、今日の光明主義は見佛派と往生派とに分れて行くやうであります。上人の光明主義は見佛主義と往生主義との二者を止揚して、如來を中心とせる光明主義であつたのが再び此の二つに分れやうとすることは最も悲しむべきことでありませぬ。

□それは見佛が悪いと云ふことではない、乍然見佛は餘程用心せぬと觀佛となり、ともすれば反つて一種の幻影主義となる恐れがある。そしてまた、往生主義はともすれば現實の生活に於ける如來の光明を忘れてたゞ死後の往生となり、所謂從來の未來主義と混同するの憂いがある。

□加之、たま／＼光明主義と云ふものが、如來の恩寵をとりそこねて、單なる有産階級や、有閑階級の娛樂念佛と化し、眞實生命の發展活動を忘れんとするが如きは上人の宗教を再び昔の既成宗教に引き戻すの運動に過ぎない。之はお互に上人の御教を深く信じ深く味ふ人々の特に注意すべき點であります。

□此の意味に於て、私はこゝに上人の宗教を一層現實化して、其の眞髓を傳ふる爲めに、眞生主義を主張するやうになりました。之は如來の光明の中に眞實に生きて働くこと云ふ意味であります。之は正しい意味での眞の見佛や、死後の往生を否定するものではありません。

□乍然、眞實の宗教は徒に見佛や往生のみを以つて、人生の目的とするものではありません。ここに如來の慈光を中心として、此の世から永遠の生命と價値の生活に此の身を活かすことが人生の眞意義だと思ふのであります。而も此のことは上人の實際生活に於て私共の常に見るところであります。して、上人の生活には單なる見佛や往生が目的では無かつたのであります。

□然し此の事は上人に常侍して、上人の日常生活を深く味つた人でなくては恐らく知ることのできる事柄であります。月かけのいたらぬさとは無れともなむる人の心にそすむとの御述懐は正しく光明の生活を説かれた上人の御歌であります。(一九三二、一一、二二)



人間は死なぬ

中野 尅子

人間は死ぬものではないのです。決して死ぬものではないのです。

嘗て多くの人々が一人のキリストを十字架にかけて殺そうとした。そして殺して了つたと思つた。然し、豈圖らんや、その殺そうとした人々の心の中に、キリストは甦つて來たのです。そして其の殺した人々の子孫にまで數千年をかけて、ますます甦つて來てゐるのです、そして將來もますます甦つてゆくことせう。

殺した筈のキリストが、今何億萬の人々の魂の中に生きてゐるのです。遂に世界は、一人のキリストを殺すことが出來ず、却て全世界が一人のキ

リストの爲めに生かされてゐるのです。いや、キリストのように尊い人ばかりが死なな

いのでなく、社會に害毒を流し社會を亂したような者も、社會からくまれ、社會から葬られたやうで、實は社會もこれを葬り去るにさは出來ず。矢張り社會の内に生きてゐるのです。社會を活かしてゐるのです。

辨榮上人も死なれたのでなく。今我々の上に生きてゐられます。そして今後ますます、四方八方に其手を擴げて、其働きを現はして行かれます。

辨榮上人が死なれたなんと思つてゐる者には、辨榮上人はわからぬのです。死なれた辨榮上人を追

善するのではなく、生きてゐられる辨榮上人を、今ヨコにまつるのであつてこそ、故上人に本當に仕へるものであると思ひます。

辨榮上人も、「人間は死なぬ」ものであることを教へて下さいました。石川五右衛門も、人間は死なぬものであることを教へて呉れました。又キリストも、人間が死なぬ者であることを教へて呉れました。この教へによつて、亦自分が、「死なぬ人間」になることが、キリストを活かし、辨榮上人を生かし、總てのものを活かして行くことだと思ひます。

「死なぬ人間」とは何か、
「なさねばならぬ」如來の使命を感じて、澤庵漬一つも切り、人の荷車一つも押さず居れぬ人のことを云ふのです。下駄一つ揃へるのも、便所の肥一つ汲み出すのも、「せすに居れぬ」力に充たされて、喜び勇んで押し切つてゆくとき、してゐる自分が不滅でないでせうか。そりや時には人に迷惑になることもあるでせう。社會に悪だと認められる事もあるか知らぬ。而し本當に正しい宇宙の

大道によつて、自分が「なされて」行く時には、必ず後になつて「良い事であつた」と喜んで貰へるであらうと思ひます。いや、そのなしてゐる現在にも、實は最善であるのです。假令、社會は一時これを誤解し、人は一時これを怨むとも、社會の爲めにも、自分の爲めにも、永遠に最善である「道」を行ひたいのです。それが自己を不滅にし、如來をします。不滅ならしめ、そのお慈悲の光りを輝かしめるものだと思ひます。

辨榮上人は自ら、そう云ふ「不滅の道」を、人に笑はれ乍ら、人から誤解せられ乍ら行つて、現實に如來さまの生きてゐられることを、身を以て示されました。

私達も亦、此の辨榮上人の教へによつて、自分達のような者でも、此の「最善の道」をおこなつて行けると體驗したいのです。こゝに自分をして不死ならしめ、故上人をキリストを釋尊を宇宙の大道をして不滅ならしめるものがあると信じます。

浄土宗を蘇生せしめし

聖者辨榮

愚 民 子

社會的存在としてはわづかに
價値のあつた寺院、葬式と法事
に必要視されて居た僧侶、未だ
それ等が多少の生命のあつた時
代に、何れかの時代にはそれ等
もなくなるとの先見から、寺院
は亡びても宗教は亡びず、今に
して活力素を與へずんば回生す
る機會なしと云ふ深い信念から
大きな慈悲から、浄土宗に力を
與へやうとせられた聖者辨榮、
それを浄土宗では異安心として
受け入れなかつた、けれ共上人

の總てのものを眼覺めさせずん
ばおかすと云ふ獅子吼は、大正
七年の高等講習會に初めて講師
として受け入れた、その上人去
つて既に十三年、光りは益々強
もなり、推尾博士の共生會の創
立の遠因もそこらにあるやうに
考へられる、たとへそれがそう
であつてもなくつても、今の浄
土宗に流れて居る信仰の二大潮
流は此の二つしかない。

浄土宗本來の信仰が七百年一
日の如く變化もなく、古い池を

出るところに熱が出る。熱が出
るから光りも出る、若き人は力
と熱を欲する、池の水からは
力も熱も光りも出ないが、流水
は強ければ強い丈、水が多け
れば多い丈、力も熱も光りも
増す、光明會も餘り辨榮上人の
みを守りすぎると、法然上人
の浄土宗、親鸞聖人の眞宗等の
如き、各既成宗教の古い型に這
入つて困る如き困りが來ること
を記憶せねばならない、私等は
先人を越えて進まねばならな
い。それは若き者のみのなし得
ることである、私等の宗教は常
に若々しいことを要する、老人
宗教は既成宗教家にまかせるが
よい、私等はそうした人々を非
難する餘祐を持たない方がよい
ランプは非難されなくとも電

燈の出現に依つて影をかくす如
く、何れかの時には此の世から
忘れられるであらう、眞生會は
その意味に於て働きかけて居る
こと、思ふ、又それでなければ
ならない、後輩は先輩を踏み臺
とし、又次に來る者も同じうし
て、辨榮聖者の意志を尊重して
行くべきである。

辨榮聖者十三回忌を追憶する
ことは後人として當然なすべき
ではあるが、追善追憶にて聖者
に對する義務は終れるが如き感
を持つてはならない、聖者の追
憶は聖者本來の意志をついで進
むことであると信する。

私は聖者十三回忌をむかへ
て、光明會、共生會の先途を思
ふて如上のことを希望する。

作つてしまつて、その周圍をグ
ル／＼廻りをしてゐる内に、光

明共生の二流は靜かに河となつ
て流れてゐる、池の水が今すこ
し少くなつて來たら驚いて、何
處からか水を流し込む方法を講
ずることだらう、水は流れてこ
そ生きて行く、同じ水ではボー
フラが湧く位が關の山だ。

光明會も餘り同じものを握り
しめて居ると浄土宗のと同じ
轍を踏まねばならない、宗教は
常に流水の如くである方が活々
としてよい、池の水になれば平
穩である丈け平安も少い。活動
がない丈け退嬰的氣分になる、
引込思案になると守成にはなる
が力が抜ける、水でも宗教でも
流れれば邪魔も出る、邪魔があ
るから反撥力も出てくる、力が

急 告

年頭に際し會員相互の賀狀交換
の煩を省く爲、眞生誌上に名刺
大に貴名を掲載致し度く存じ候
間、御賛同賜り度、掲載料とし
ては金壹圓也を頂戴する事に致
し候、これは眞生正月號を倍大
號にするにつき、其の費用に宛
て度くと存じ居り候次第に御座
候、尙御家族連名の御希望の向
は、御申越被下度、二人迄は同
額にて御取扱申上候、右何卒御
承諾の程願上げ候。 合掌
尙「眞生」新年號は「眞生主義」宣
傳の爲一部二錢（費用の缺損は
本部にて負擔）にて頒布致し申
候間年始贈答用として、精々御
利用願ひ上げ申候。
申込は十二月七日迄に願ひ上
候。 眞生編輯部

朝鮮傳道を終りし頃遇感

岐阜 山田 淳 應

○今更のごとく喜ぶ皆人の心に彌陀の慈悲がおがまる。
○おしなべて彌陀の恵みにうるほされもえでる姿見る嬉しさよ。

病床にて大會を偲びて

名古屋 屋上 ざん子

○身はこゝに心は大野に通ひつゝ過す四日の永き事哉。

婦人部方々の御骨折りを謝して

○この葉もおよばぬまでに法の友誠心こめし御業尊し。

○うるはしき友の力に事もなく重きつとめを果すうれしさ。

土屋先生の御講演を友より傳へきよて

○師の君のたゞへまつれる眞生道我が一生も捧げまつらむ。

車窓より

東京 神谷 善之進

○水上の利根の谷間は紅葉して見上ぐる山も錦なりけり。

○北海の夕日は波に輝きてはるかに見ゆる佐渡の島山。

○うら／＼と六字となへてまざるめば搖れも響きも助行なりけり。

辨榮上人を偲びまつりて

東京 土屋 美和子

○時を経て年を重ねていや深くそのみをしへの尊さをおもふ。

○みをしへの尊さを思ひ涙しぬいそしみ足らぬこの悔心。

○ひたすらに法のみおやをしのぶ今日つゞきてつきぬ思ひ出の糸。

ひ

か

り

追恩の記



大阪 豊田省三

大阪としましては直接故人をお迎へして御別時の御指導を蒙つた譯けではなかつたのですが、誠に不思議な御因縁で上人の御遷化の日が偶然大阪で始めて光明會のお別時を始めた日であつたのです。上人は大阪へ光明主義の根をおろしたと多年心掛けて居られた様でしたが其機が熟せず、遂に大正九年の秋になつて漸くその芽が生へ、御希望の實現を見るに至つたのでした。私は當時を追憶しますと誠に奇縁と申しまじやうか、眞に如來のお引合せさしと思へない難有い感があるのです。大正九年の十月十六日から同月二十日迄五日間の祖山勢至堂でのお別時は、上人の祖山に於ける最後の御別時でありました。私は當時養父の許に通つて父の用事を手傳つて居つたのですが、かてから上人御指導のお別時の尊いことを聞かされて居つたのさ、先妻に二人の子供を置いて逝かれ、剩へ私の學生時代に世話になつた姉夫婦の事業失敗の救済策で少からず頭を痛めておつたので、道を求めたく故上

人を見ぬ先からお慕ひ申上げておりました。上人の尊いお方である事は、當時大寶寺の泉上人や長圓寺の三木上人から聞かされて居つたので、上人のお別時に是非参加したいと思つたのでした。丁度其年の十月十五日に、私は養父の許して(略)翌日から自宅に居る事になつたので、祖山のお別時に馳せました。(略)勢至堂に着いた時は丁度上人の午前の法話の最中で早速お堂の隅で家内と共に法話を承つたのでした。上人のお話は私が今日迄承つて居る念佛に對する考へ等と非常に變つたところがあるのさ會衆の眞剣な態度と道場の關係等に私は全く此のお別時に引きつけられて是非五日間を此の道場で送りたいと考へました。(略)夜は智恩院の雪香殿で信仰座談會が催されました。私は青年時代から重なる道境から、何んぞかしてしつかりとした信念を得たいものさ考へて、禪學もかじり、眞言の法話も聞き、又はクリスト教の會堂へも出入して、色々心の落付きどころを探し廻はつたが、情ない事には機根が劣悪なためか、四十歳の聲を聞く迄は眞に力さましい信念の持主とはなれなかつたのです。併しながら、あさましい事には宗教に關した話には相當理解も云ひ六ヶしい事を口走つたりして、あさで耻かしい思ひをした事などおつたのですが、眞實のところは全く空虚と申して宜しいのでした。私は最初の程は念佛に信仰が起らなかつたので、色々

な方面へ走つたのでしたが、上人のお別時に参加して、驟然と念佛の信仰に入る事が出来たのでした。上人の説かる、光明主義は現人の青年の希望に即した宗教でした。従来の念佛の信仰はあまりに未來主義に捕はれた結果、所謂現實に即した念佛の信仰がくされて居つたのでした。上人は現代を救ふために、此のかくれた念佛の信仰を高唱されたのです。即ち私共の日常生活は如來光明裡の生活であつて、萬有は悉く如來大悲のあらわれである。一草一木の上にも、如來の血がみなぎつて居るのである。如來は絶えず大悲を以て、私共を活かし育てんき辛勞苦せられて居る。私共は之を氣づかずに居るために、如來に眞向きになつてお縋りする心になれなかつたのである。眞に私共は如來の最も愛する佛子である、只一心にお縋りする事により、如來に靈育せられ、身も心も甦り、希望に充ちて、洋々たる天地を見出し、人生の意義がはつきりする、人生は決して無意義なものでない、人間が生れた幸は、佛と等しい自覺の下に、最も有意義な人生を送るにあると、懇ろにおさとしを受けたのであります。私も四十年の久しい間、かゝる慈愛に充ちた、而かも心の底迄しみ渡つた、更生の意義深き説法を承つた事はなかつたのであります。此の五日間のお別時は實に私の生涯を通じて再び逢ふ事の出来ない悦びでありました。私は此の悦びを一人で私す

べきでない、是非共此の悦びを廣く有縁の人に傳へなければなりません。之が恩師上人に對する報恩であり、又國家に對する義務であるを考へました。そこで當時祖山で同座した。長圓寺上人にお願ひして、辨榮上人に御紹介を願ひ、大阪に光明主義植ふつけの御相談を申上げたところ、上人も非常なお悦びで、是非共に力を貸す様にこの御話でありました。そして、その年の十二月、明石で講習會があるから、それへ行くと途中大阪へ立寄つて、大阪光明會に出席しやうとお約束下さいました。上人は祖山のお別時が済むと北陸の方へ巡錫されたのであります。此日が丁度大阪では生玉の大寶寺で大阪光明會の最初の三昧會を初めた誠に思出多い日でありました。そこで此の日は終生大阪としては忘れる事の出来ない日なのです。(略)そこで大正十年以來上人の御あきをつがれた土屋上人にその御指導を願ひ有爲の青年を中心に眞生主義の名の下に普及徹底を見んとしつゝあるのであります。之は眞に慶賀に堪へない次第であつて、及ばずながら私共も其驥尾に附てお世話させて頂いて居る次第であります。聊か上人の十三回忌をお迎へするに當り蕪辭を並べ追恩の辭をいたします。

思ひで

岩下祥兒

◎私は！ 私普通橋向と稱する、所謂鶴川橋畔の坂の處で生れて、そして其處で育つたものであります。只今記憶にはつきりして居りませむが、二十五年以前秋の小春日和のこゝであつたかと思はれます。私の家の向ひの寡婦のおばさんは極樂寺の墓所を受け持つ隨方に雇はれて居る人でありますが、或日無表裝の掛軸を私に示して曰うには、「これは只今極樂寺様においでになつて居られる、辨榮お上人様とおうせられる、御高德の聖り様がお書きになつたお観音様です」と、さもモツタイらしい口調でありました。私は一寸皮肉な眼で拜見すると、墨繪のあまり上手だとも思はれない、乙姫様がテ、ナシゴを生むで始末に困つて居るやうな圖でありました。私は思ひました、一體近頃のボーイズは己れ等がくてもない行爲をして居りながら、口では殊勝らしいことを稱ひ、七條さかいヒカ〜

した袈裟を着て、顔に油を塗りつけ、禪師様さか上人様さか偉らそうなきを吹聴し、録でもないものを佛様と稱して有難そうに賣物にする。そして善男善女と云へば氣がきいて居るが實は愚夫愚婦、こゝに死際に近づいて居るお婆様たちをたらかして、臍巾着を絞る一種の策士だうと推測して微笑しました。それから數日過ぎて、私は極樂寺大門で末の妹と風で落ちた檜の實を拾つて遊ぶで居る。傍を通過する一むれがあり、少くも少し猫背で一才左の方に小首をかたげた、麻の衣の坊さまが胸の處に兩掌を組んで、下目づくつて行く。背後に數人の侍僧が一、癖有りそうな面構へで従つた。私は此の時私が秘に私語しました。「先日繪の坊主はこれだな」と、そして其の時の印象は永く〜私の腦裡に刻みつけられました。地球は廻轉して止みません。幾星霜は夢の如く経過致しました。私も浮世の荒浪に虐げられ、苦なまれば、兎に角も歩るきつゞけて來ました。實にその姿

は哀れなものであつたかと思はれます。然し〜私には終生を通じて忘れ得ざるの時が興へられた。それは大正の御代も十五年の秋十一月の事でありました。不可思議の恩寵によつて、恩師土屋觀道師と離る可からざるの縁縁に恵まれました。そして恩師を通じて山崎辨榮聖者の御高德であらせられしことを拜職し、今さらの如く、過去の思ひ出を新たに致しました。そして過去に於て自己の愚かなる測らぬいよりの推慮して居た事、あまりにも醜くさを慚愧して、背汗淋漓たるをおぼえざるを得ないのであります。穴あらば這入りたく、聖者ましますば膝下にひれふしてお詫びしたい思ひで、一杯であります。柏崎の地はどうした恵まれたる處であらうか、この偉大なる崇高の聖者が永遠の生命を託する、御入寂のお地さお定め下さいました。極樂寺の山裏、松籟の音幽しき小丘に、いま現に御入定ましますことを……！ 私は墓前に叩頭して、至心に合掌して居ります。思へば恩師を通じて聖者の御厚恩が私の生命の中に流れ込むで、躍動してやまぬもの、あるのを痛感して、涙を禁ずる等が出来ませむ。私は聖者の御意志を相續し、恩師の指揮に従つて、ごままでも道の爲めに活動してやまないことを固く〜お誓ひして居ります。

お上人に接しての感激の一

東京 千葉 秀胤

お上人様に始終御目にかゝつて、いろいろの御話のみならず、日常の御動作を伺ひ上つたその折々私は聖者の御心と御覺悟の中心點を自分が享けたいとのみ願念でありました。

お上人様の心と身のお動きの量の偉大さは、皆認めらるゝところであります。がその量の大き強さ而して寸分も隙なき活動生々躍動の有様は、お上人様が動的活動靜的禪定の云何なる場合、御睡眠の内にも、認めらるゝ事は、お上人から私が一般の光明生活のその上に、奪き賜物でありました。

扱お上人様の之の日常の御行状のお心と身體を如上の様に無間斷、長時に活躍の根本は如來正に聖者の心にあり、如來正に聖者の身體に宿り玉ふ故に、自

分は確信いたしてをりました。

勿論その時に思つてをりました。單に活動活躍、秒時利用丈をお上人様から頂いたならば、或はお上人様と大變かけ放れた人間になつたらうと思ふのであります。自分はお上人様の彼の偉大な晝夜をやめぬ活動の心の本は、お上人様の出發點は、如來の光明裡に安住せられ、その十二光佛の光明界中に照益を享け終つた、聖者は、此の境地の如何に絶對無限の言語に絶した至上の境地を、世間の人間が、蠢々餘りに氣の毒な迷妄の活動して、而も其結果が益々かけ放れた奈落の境地に陥る憫れさを、早く覺悟させ、早く如來の光明裡に安住させたい。之れには、少しの障も、餘裕も、待つてをられない。之の佛心が彼の三業に顯はれ玉ふ

たのであります。深く感激して、夫れには自分もどうしても、如來の光益の中に生活して、その中から、私の三業の動きならん内は、自分は自分自身少しも油断もならず、何しても、如來の光明を蒙りたいと思ひました。

お上人様は、時々靜かな「たゞ見ては何の苦もなき水鳥の足にひまなき我が思ひかな」の歌の心が、自分にあると座談遊ばされました。之の思は、聖者のお心如來の聖言を、どうしたら、よりよく顯現せらるゝであらうかどうしたら、一般人が目醒めに入るのみならず、之の眞の世界の如何に至上味を享けらるゝかを、尤も御親切の極、御慈悲の極から、日常晝夜、而して御臨終の其の御刹那迄の御行状であつたのだと、私は拜察してをりますのみならず。私も平常の三業も之の内におきたいと日々刻々お上人を思ひ出さないことは御座りません。

辨榮上人憶ひ出の記

柏崎町 原 ともみ

大正五年四月、辨榮上人が極樂寺に御滞在遊された時、私は始めて主人と共に上人に拜顔いたしました。上人様はニニ／＼として「よく出られました、さあこちらへ」と、御自から側近く迄にお進みになつて、私に對して「あなたは何か信仰をおもちですか」と申されました。けれども私は信仰が何やら何もわからぬので其旨御答へ申上げがたくなつて居りましたので、御上人は「それは却て結構であります。なまじへんが信仰をもつて居るに困るで、白紙の方がよろしいとお仰せになりました。一冊の小さな御本をお出しになつて、「これをよくお讀みなさい」といつて、くださいました。歸宅後よく拜讀いたして居ります。なんだから宇宙大靈の存在を、又自分といふものがうす／＼ながらも判つてきた様な気がいたして「斯様なお話しならばお聞きしなければならぬ」と思ひまして、夫より毎日參詣に出ました。

御上人は年に二三回御巡錫御教化下さいました。其翌年御來越の節、極樂寺で佛晝をおかき遊しておいでの時、私は御上人様に一つの御願ひをいたしました。それはほんごに御上人様のおなつかしさを忘れぬ爲めに、御上人様御自身のお姿を書いていたと申上げました。其時はばあさ申されて居られ

ましたから、御承諾下さつたこと、よゝこんで居りましたら、いつ迄たつても書いて下さいませんで、どう遊したのだらうお忘れになつたのではないだらうかと御伺ひいたしました。此時は御返事がありませんでした。主人の申しますには「そんな形骸にさらわれて居る様ではだめださ、いふ、御見識だと思ふ」といはれて、私ははつと「あ、そうだ念佛を一心にはげみ如來様をお忘れぬことが、即ち御上人様を忘れぬことであつたの」と、氣がついた時は、づい／＼と谷底へつき落された様に感じて、思はず冷汗が流れました。「何卒許して下さいまし、私がいならぬばかりに御上人にさんだ御心配を御かけしました。もう決して御願ひいたしません」と心におわび申しあげました。其年も過ぎて、翌年不意にお上人様から一葉の御寫眞が届きました。開いて拜見いたしましたら、實によくお寫りになつたお姿でありましたので、其時はなんといふことなしに涙が流れました。よくまあお忘れなく御心に掛けて居てくださったこと。

其の御寫眞に歌一首

四つもの、かりのすかたは

さもあらばあれ

こゝろは常に

なむあみた佛

或年、私病氣治療の爲め、出京芝の多聞寮に御厄介になりました。幸ひ上人様も御在京あらせられて晝は外出遊されてお留

守になり夜に入つて何かお書きもの遊して居られました、私が一人でお側に居りましたら、「何か聞きたいことはないか」と申されました。「十二光佛のお話を承りたい」と申上げます」と「あ、それは私の生命であります」と仰せられ諄々とお説き下さいまして、なんともたまへ様なきありがたさを感じました。

其後大正九年十月京都智恩院の聖至堂に別事三昧會が勤まれるさいふので極樂寺の奥様と共に、隨喜させていたゞきましたその三昧會が御上人様最後のものとせならうとは夢にも想はれないことでありました。其後新潟から長岡柏崎へご御教化下さるごことになつて居りました、柏崎でも十一月十六日から一週間別事が勤りましたので、私共も参加させていたゞきました。お上人様は十一月十五日に長岡からお着遊されましたけれども、お風邪氣でお熱が御ありで十六日の朝本堂へお出まし遊されたので、其後は御臥床遊したきり、遂にお出まじが出来なくおなりなされました。ほんまに心配で「お病床に上つて米袋をさりかへたり、御手や御足をおさすりしたり。いたして居るさ、」そうして看護してくれるのも有難いがそれより本堂へ行つてお念佛申じてくれた方が又うれしいよ」と申されますので、はいさいつてお念佛申しに行きますけれど、何んが落ちてきませう、又々直ぐ御病床に返つては、お側でお用をいたして居りました。何日経つてもお熱が下らぬので、お側に居つて心配でならぬのに、人様がお一人でもお見えになるさ、「御無理だがなあ」と思つてもお床の上につきあがられて、御説法遊すので氣が氣ではありませんでした。いろ／＼と手をつくしても、どうしてもお熱が下らず、だん／＼御様子がよくないので、夜中は主人と共に極樂寺の皆様と交代で、お側におつきして居りま

した。或夜などは主人に「原さん何かお話をして下さい」と申されて、宅では恐縮したことなごありました。お話にかへて百萬べんのじゆすでおかこみして、廻りでお寺の方々を禮拜儀をあげて、御念佛を申しましたら、翌日京都の恒村様が「あんな方あんなことなさる普通の人ならあんなま、いつてしまはれますよ」と申して居られました。御病症がよくないので、全國各地から御見舞に、日々二十三人位の方々が出入されました。或日お手をおさすりして居ります「御念佛を申しなさいよ、忘れてはなりませんよあの太陽が日々東から西へ出るのも山々の景色も谷間を流れる水も、又鳥のさへづる聲も、みな真如のあらはれである、萬法萬行これみな真如であるわかりましたか、忘れてはなりません、御念佛を申しなさい」とこの御言葉「はいわかりました決して忘れません」と御誓ひ申上りました。日々御病氣は進まれ、だん／＼御言葉も不明瞭となり、十二月三日夜、極樂寺の奥様と私の手をしつかも持たれて「死んで御はなれぬ」とお仰せになりました。なんだかかなしくて御念佛を申そう様にも聲が生まれませんでした。

だん／＼御臨終もお近いさ心に思ひ、一心に御念佛申して居ります「御身體をたいて、御念佛の御催促されたので、木焦をとりよせ、土屋の奥様がまくらへでうたれ、一同が御念佛を唱へて居りましたら、太鼓、ふえ、せう、ひちりき、かね等の樂の音が堂に満ちて私に聞へてきました。ほんまうにありがたく感じました。而して十二月四日午前六時に御念佛の中に遂に御遷化遊されました。」

このご記憶いまだ新らたなるに最早本年は十三回忌を御勤め下さることになりました。實に歳月の過ぎるは夢の間で少しもゆだんがなりません。愈々一心に御念佛申さなければならぬさ、心にむちうつことでありませう。

辨榮聖者を追憶しまつりて

柏崎町 渡邊 八右衛門
同 せせ子

憶い起せば大正九年霜月半ば菩提寺の極樂寺に於て、辨榮聖人御導師の御別時會に隨喜させて頂きました。

御聖人様には御風氣にかゝらせ給いて、御高熱の爲め御本堂への御出まじなく、御容體を御安じ申上げつ、祈る心も切に至心に如來様に只々御平癒を御祈願申し上げて居りました。

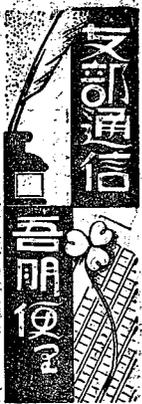
時しも廿二日の御満願の日、御道場より下りました一同に極樂寺方丈様より、御聖人様へ最後の御挨拶に、一同を御病室へご御案内下さいました。御聖人様には御高熱の御尊體を私共のために、御床の御上に御起き遊ばして、いつに變らぬ御慈愛こもれるおまなざしに御病軀を御忘れ遊ばしたかの様に御いつくしみ深き御説法のかす／＼と、御十念を御授け頂きました。

一同感激するのみで涙の内に御別れ致しました。程經て、日夜御看病遊ばす極樂寺御奥様を通して、未熟の私共二人へ、特にこの御言葉が御座いました。あの渡邊夫婦と原樺御夫婦とで中心となつて早く眞光寺（明治四十四年の火災で類焼のまゝになつて居りました）を再建して、御念佛の道場を御開きなさい、あそこは町の中央でもあり、人々の集まるにも好都合だから、必ず／＼御念佛のひろまる事まちがひない、早

く眞光寺を御建てなさいと仰せ下さいました」と。この御言葉承つた私共は、只々恐懼に堪へず、力弱私共に、そんな大きな御仕事が出来てあらうかと、一面不安の念にうたれましたが、又なんとも言葉に云ひ表はし得ぬある大きな御力を植ゑつけて頂いた様な感じが致しました。思へばそれが私共への御聖人御最後の御遺訓とならうとは全く思ひませんでした。

月日の流れは足早く、御遷化の悲しき御日を送迎して、こゝに十三星霜、其後眞光寺はあまれき御結縁の方々の御盡力により、再建の喜びに會ひ、同時に土屋觀道先生御教導の下に念佛道場として開放され、原様御一家を初め、當地の熱心なる道友の方々もゆるが如き信念の下に、微力なる私共も慈光裡中に念佛精進させて頂く様になりました。木魚の響、蟲々として、御念佛精進によりて、活かざるゝ人々の多くなつたのも、一に御聖人様の御肉身を通しての御照導が、十三年後の今日、現實されて居るさいふ事はなんさいふ身い恩寵で御座いませう。

大みをやのみとさより、大いなる御力もつて、私共を御加護下さる御高恩を、現在の恩師土屋先生を通して居ります。の念に堪へず、ごことは私共の腦裡に活かされて居ります。御聖人十三回忌にあたり、故聖者を追憶し奉りて、今後益々熱心力を以て御遺訓の御言葉に添へまつる様切に念願いたします。



眞生同盟秋期大會情況

○我が眞生同盟は今夏唐澤の全國大會を中心に、近來長足の發展を遂げつゝあることは吾等道友の等しく感激に堪へないところであるが、今度の名古屋に於ける眞生同盟の秋期全國大會は遂に去る十一月四、五、六の三日を期して、名古屋西の目、尾上氏別邸に於て開かれた。

○尙今回の集りは辨榮上人の十三回忌に

も當り、それに地方大會としては初めてのことでもあり、どうかと思つて居つたところ、尾上氏の到らざるなき御厚志と名古屋道友の限りなき御盡力により、萬事の準備整つた爲め、豫想以上の盛會を收穫があつたことは如來慈光の宣傳の上にも此の上もない喜びである。

○大會の詳報は何れ情報部長より報告あるべきも、未だ其の報に接せぬ爲めに、その概略を小生が代理するが、三日間に於ける盟主觀道氏の「眞生主義に於ける史的考察」は前便にも其の要目は發表せられてある通り、人類生活に於ける宗教の必要より、印度に於けるバラモン教と佛教の相違點、並に根本佛教と原始佛教との相違、小乘佛教と大乘佛教の比較、聖淨二門の分別、自力教と他力教との違い、淨土宗と光明主義、光明主義と眞生主義の史的發達とその展開とを逐一に述べられたことは道友一同の感激おく能はざる所であつた。之は今回の集りに於て、道友も特に聞かんとするところであつたが、盟主も全身を込めての絶叫であり、

満場肅として聲なく、時には感銘してひそかに袖をしぼるものさへあつた。就中、眞生主義の史的考察の辨證法的論述も實に驚前倫理のたゞりには念佛一行に於ける眞生道を一層に明確にした感がある。

○尙午後の時間は主として、眞生運動の團結並にその發展の方策についての協議會があり、又一面には信仰増進の方策として、如來中心主義の内容充實の相談があつた。

によつて速記せられてあること故、何れ製本として道友の前に送られることであらうが、道友には特に此の際熟讀を要望する。

○最後の目、午後の二時からには特に尾上氏の厚意により、一同庭園で記念の寫眞を撮り、三時からには道友に對する慰勞の會が開かれた。心盡しの御馳走や、眞生マアクを染め抜いた立派な布呂敷まで添へられて、限りなきもてなしに預つたのは道友一同の感謝して止まぬ所である。人のまごころも、まで行けば寧ろ感謝さ云ふよりも勿體ないほどの氣持もする。記者は道友のすべてに代つて厚く尾上氏の御厚意に感謝する。

新潟縣下女子青年團の活躍

- 今回本縣刈羽郡女子青年團主唱のもとに自力更生運動として、土屋觀道先生に郡内巡講を御願ひ致しました處、先生には日夜非常に御多忙のところ、曲げて其の快諾を得たので、柏崎眞生同盟は勿論同郡女子青年團でも非常な熱意を以つて専心その運動にこりかゝりました。
十二月十四日午前 刈羽村尋常小學校 聽衆二百、高小生百餘。
午後 内郷村中川小學校 聽衆五百。
夜間 柏崎町眞光寺 道友座談會、聽衆六十。
同 十五日、午後 北鯖石小學校 聽衆三四百。
夜間 柏崎小學校 聽衆六百。
同 十六日、午後 鶴川小學校 聽衆三百。
夜間 柏崎商業學校 聽衆二百。

念佛修養會

- 同 十七日、午後 千谷澤小學校 聽衆三百五十。
夜間 柏崎町眞光寺 念佛修養會
同 十八日、午後 北條第一小學校 聽衆三百餘。
夜間 柏崎町眞光寺 念佛修養會
同 十九日、午後 高濱小學校 聽衆二百餘。
夜間 柏崎町眞光寺
以上は講演の日割並に會場とその聽衆の列記に過ぎませんが、此の間同盟幹部と女子青年團幹部の御盡力は實にめざましいものがありました。或は汽車に自動車に、寸暇も無い程にあちこち馳け廻り、其の講演の準備にお骨折りを頂いたことは全く言葉につくせません。先生の講演は國家多難の際、個人的にも社會的にも、否、國家そのものの發展にも、あらゆる自力更生の必要を高調せられました。而も其の自力更生をいかにして達成するかと云ふ點に至りては之を

宇宙の法則に従ひ、天地の大道に則つて、如來を中心とする念佛の生活より外に、之を完ふする道はないと、聽衆に向つて絶叫せられ、宗教と生活の離るべからざる事を繰説せられました。恐らく此度の傳はご、先生の主義と主張とを我が郡内の民衆に呼びかけて頂いた事はありますまい。而して、初めて聞く聽衆の心にも恐らくは此の度び眞實宗教の人類生活に無くてはならないことを痛感した事もないと思はれました。

次に同盟幹部の熱心なる後援と數日に渡る團幹部諸兄弟の御努力全く驚嘆に値するものがありました。

就中、團長田中夫人副團長桑野夫人の御熱心、連日晝夜一日の缺席もなく御活動、或は會開の辭に或は閉會の挨拶、先生の紹介等男子も及ばざる其の精進さには全く敬服の外ありませんでした。更に場か思い友を思ふの桑野夫人の一言一語は聽衆の肺腑を突くものがありました。世に信仰の力程恐しいものはありません。之は全く同夫人の信仰のあふれでありました。

此他、各地團員並に幹部の御盡力、或は學校長の御骨折りなど許り多大のものゝあつたことは言ふまでもありませんが、眞生同盟の幹部並に道友の心からなる應援とその心盡しには全く今までにない大きな力がありました。

岩下祥兒、竹田爲五郎の兩氏は初めから終りまで、一日一回の缺席もなく終始一貫寸時も先生を離れずして御盡力を下さいました。殊に會の前夜毎度「立てよ立てよ」の更生歌を會員に勧めて其の音頭をとり、會の氣分を一團として和樂の境地に至らしめて下さつたことは一に岩下氏の一大効果と云ふべきでした。

その他、小山一耶氏の殆ど連日に於ける御隨行、或は渡邊八右衛門氏、小原啓太郎氏、原哲郎氏、會田延氏、原(吉郎)渡邊、會田、曾田、三井田、市川等の諸夫人達が其の御多忙の中からも一日二日、或は三日四日に渡つて連日御隨喜下さつたことはいかばかり眞生運動の大なる力となつたか判りません。

殊に、渡邊氏の數度に渡たる會員への激勵と、集まれる女子團員への熱心なる

催す。各専門の立場から種々意見の發表あり、最後に土屋先生からも眞生主義の立場から論説せられ、非常に有意義な會合であつた。

- 出席せられた名士は(イロハ順) 池田松坂新聞社主、岡縣會議員、吉田在郷軍人會長、竹中料理屋組合長、中條社會課主事、山名第二學校々長、松浦商業學校長、古川御前組合長、甘利工業學校長、更谷第四學校長、下條警察署長、白井第一學校長。

(大講演會)十九日夜、信用ビル三階大ホールに於て大講演會を催す。有名(?)東松坂時間といふ悪習を打破つて定刻には二百有餘の聽衆が集られて、全く豫想外の盛況であつた。土屋先生の御講演は「自力更生と眞生主義」と題して、一時間半の熱演であつた。

後更に座談的に質疑に應答せられ、多くの共鳴者を得た模様であつた。津島支部 支部長として推戴することに決定して

ゐた、大先輩、中野俊一氏が去る十一日長逝せられたことは遺憾至極でありました。而し其の遺徳を無にせぬように、爰に組織を新にして立ち上ることにしました。

例年の「一味の會」の三日間の集り、藤井様宅に於ける土屋先生の、三日間の特別修養會に於いて、眞生主義の信仰が大分新しい方面へ理解されて行きました。まだ「我々としては一致の積極運動が足らぬことを感ずります。

誌代寄贈並拂込者御芳名

- 壹圓宛 柏崎 田中さん様、東京 天正雄次郎様、大屋安一様、佐賀 森田昇雄様、岐阜 佐溝日出一様、尼崎 田中彌一郎様、津島 山田才助様、大垣 藤田延子様、加藤彦郎様、
- 貳圓宛 柏崎 小原啓太郎様、後藤甚次郎様、大阪 土屋修様、
- 參圓宛 新潟 西照寺様、和歌山 法蓮寺様、
- 五圓 名古屋(願王寺様、勝野くわ様)

勸告は至誠のあふれと信仰の力が一つとなつて痛く其の胸を突いたものがありました。

十一月二十日の午前と午後とは團と同盟とが一緒になつて、柏崎の天屋で先生の慰勞會が開かれました。集るもの五十餘名、全くお互喜びに充たされて其の日の暮るゝのも覺えませんでした。(柏崎情報部)

三重縣松坂支部報告

(同志の活躍) 大石で生れた同志松井、安田、村木の三君が大石松坂眞生化の爲盛んに活躍して居られる。

小島喜兵衛はカナリ以前から熱心な後援者であつたが、今回の催しについては、其の多忙な時間を割愛して盛んに奔走して頂いた事は全く感謝に堪えぬ。

松坂では小津家の當主敏輔氏も最近熱心なる同志となられてしきりに活躍して居られる。

(諸名士の座談會) 十月十八日、信用ビルの一室に於て、町の有力なる諸名士十餘名を御招待して、土屋先生を中心として、「自力更生と宗教」について座談會を

編輯後記

□當記念號には各地より澤山の原稿を寄せられ、編輯員一同大變喜んだ次第であります。が、何しろ僅の紙數に載せたいものばかりで、勝手に加減させて頂いたり、翌月廻しに致されればならぬものも多くなりましたが、以上の次第、どうかお寛教願ひます。

□次は昭和第八正月號! 「生活と宗教 特輯倍大號」に致します。編輯員一同希望を新にし元氣を新にして、大いにがんばるつもり。至急各位の御投稿を願ひます。

「眞生」原稿 締切—毎月廿日 送り先— 東京市京橋區入舟町三ノモノ一 谷口 虛空

Shinsei

最新刊

佛と見たる春

土屋觀道述

四六判六〇頁 定價十二錢

特價提供

(五部以上二十錢 送料一部二錢宛)

本書は時代に鑑み入信者の見佛について、その生活の活動を書いたものであります。發行以來未だ日ならずして初刊一千部忽ち賣切れとなりました。尙續々と註文がありますので、更に五百部を増刊いたしました。人心不安にて最も宗教の必要を感じる今日、年末年始の贈答品としても最適道友の諸彦にお勧めいたします。

第二版發行

眞生同盟發行

眞生社
東京芝公園四丁目九番
電話 振替 芝一六〇八番

東京市芝公園十四號地九番
發行兼編輯人 土屋觀道

東京市澁谷區中通町二ノ四二
印刷所 丹丘舎印刷所
副島慎夫 電話 青山五五番

本誌定價 一部 十錢(郵稅共)
半年 六十錢(同)
一年 一圓(同)